

I-4 白幡総合探究II

(1) 研究仮説

ア 令和4年度は、これまでのSDGsのテーマを踏襲しつつ、地域課題の解決を主軸とした課題解決型の探究活動を行う。「白幡総合探究」を通して生徒自身が、地域（本校所在地の龍ヶ崎市）の課題について、興味関心を共有するメンバーとともに対話的・主体的に探究活動を行うことができるであろう。

イ クラスの垣根を越えたグループを編成する。仮説を設定、研究計画を立案、指導教員との間で議論を繰り返し、協働的に研究の方向性や内容・研究方法を改善していくことで、研究を深化させることができるであろう。

ウ 文献やウェブサイトの情報を基にした調べ学習に留まらず、実験や校内・校外へのアンケートを行う。これらの調査などの活動を基に得たオリジナルデータの考察から、プロトタイプを作成することにより、科学的・論理的思考や方法の技能が向上するとともに、より独創的・創造的な研究が実現するであろう。

エ 校内生徒研究発表会においてポスター発表を行う。積極的に質疑応答に臨むことで「問う力」やコミュニケーション能力の育成を図ることができるであろう。

(2) 実践

ア 対象 2年A組41名 B組41名 D組37名 E組40名 F組42名

イ 単位数 総合的な探究の時間 1単位

ウ ゼミ・探究テーマ

所属ゼミ	教室	班の番号	班のメンバー	ポスター発表における発表テーマの表題	SDGs ゴール	関連する ゴール
松尾ゼミ		1	池田悠 横山真杜 川西悠太 鈴木天心	ゴミを分別しよう	11	15
松尾ゼミ		2	服部至恩 山崎琢磨 芹沢 能崇 武井 大和	子育てに対応した支援	3	11
松尾ゼミ		3	荒井康太郎 大石 陽士 荒井瑞祈 白石龍河	スポーツと子供を通して高齢者を「健幸」に	3	16
松尾ゼミ		4	古賀優大 成田伊吹 秋本 翼 永井開 澤渡盛敦	結婚しようぜ！！～非婚化・晩婚化を減らし少子化対策を～	11	2,3
松尾ゼミ	2A	5	武智優花 齋藤東苑 湯原大地 照井玲奈	子供たちの野菜嫌いを克服しよう	3	2,4
松尾ゼミ		6	森麻緒 佐藤日和 新居見 幸大 木村百花	ごみのポイ捨て・不法投棄の問題を解決するには	11	15
松尾ゼミ		7	根本雪音 片桐琢斗 鴻巣央河 重野 羽輝	学習意欲の向上	4	9,11
松尾ゼミ		8	佐藤夕月 向山菜々香 高須香帆 長嶋充斗 蛭原佑菜	コミュニティバスを広めよう！	11	8
松尾ゼミ		9	小倉葉子 梶山ひばり 塩田咲幸 清水勝喜 宮本晴叶	教職員の負担を減らそう	4	8
岡田ゼミ		10	川上 裕 安東咲 田口 暁翔 吉田伊吹	フードロスをなくそう	2	1,12
岡田ゼミ		11	利根川美羽 井上桃歌 遠見葉里 川尻真之佑	子育てしやすい町をつくろう	11	4,10
岡田ゼミ		12	鎌倉尚大 高城耕平 加賀七星 水藤 日南乃	住んでみたいと感じるまちづくり	11	8,9
岡田ゼミ		13	文字優歌 渡邊 穂乃香 小林 あかり 塙 幸輝	家庭でのフードロスを減らそう	2	1,12
岡田ゼミ	2B	14	西大條 はな 山口美月 飯嶋奏太 新出 瑩乃	町の入り口「駅」の発展と経済	8	11,9
岡田ゼミ		15	秋葉雄太 長内大直 荒井 駿志 佐々木優吾	龍ヶ崎商店街の再興	8	11
岡田ゼミ		16	篠崎 翔 向井凜 佐藤結衣子 常平萌衣	龍ヶ崎市の農家の後継者の増加	11	7,15
岡田ゼミ		17	大竹つぐみ 宮川みづき 林萌香 松下ひかり	教育の課題を改善するには	4	10,16
岡田ゼミ		18	石川 颯空 遠藤 詩深 磯崎怜生 有福悠佑	龍ヶ崎市の農業を活性化しよう	11	7
岡田ゼミ		19	竹内 結 千葉 帆乃佳 三枝琴音 高野琉斗	地域の防災体制と災害後の対応	11	13
上久保ゼミ		20	原田和洋 富田 藍 川崎 稜馬 山王元貴	龍ヶ崎周辺の農業の活性化支援	8	12
上久保ゼミ		21	榎本紘大 坂井佳音 松本明華 石澤治弥	BYOD体制の見直しと改善	4	10,17
上久保ゼミ		22	重藤 夕佳 川畑帆乃香 染谷遼太 仲村愛子	若者の流出を止めるには	11	12
上久保ゼミ	2D	23	塚原七海 太田優乃 本多彰章 川崎瑞季	学校生活におけるジェンダー	5	4
上久保ゼミ		24	森岡潤 矢崎康介 永野陽香 山本望愛	子育て環境日本一	4	11,16
上久保ゼミ		25	余吾 和樹 大谷花凜 北原美保子 大久保逸人	子どもの教育の向上	4	2,9
上久保ゼミ		26	大西莉奈 池宮煌晴 笹井 星湖 吉田音楽	特産物による地域の認知度向上	11	8
上久保ゼミ		27	小磯 一翔 仲島 来笑 北原清志 猪川 凜々花	茨城教員project	4	16,8
上久保ゼミ		28	都川 華奈 久保田 真生 廣瀬かれん 杉野詩乃	校則の改善	4	10,16
及川ゼミ		29	日辻 陸 福島 好花 真木大成 関口 詩織 根本陽輝	若手の確保による地域社会の維持	11	9
及川ゼミ		30	玉井晴 田口 葵 吉田陽玲 市川陽翔 大室 颯己	龍ヶ崎トマトを有名にして龍ヶ崎を活性化	11	2,3
及川ゼミ		31	鈴木雄真 田村優貴 小倉聡太 根本佳明	公共施設利用の促進	1	17
及川ゼミ	2E	32	正岡 龍弥 秋田七海 田中 希 橋口香楓 真木葵衣	若い世代の伝統文化の認知度を上げよう	11	8
及川ゼミ		33	隼 宇史 今野正宗 櫻井優有 柿沼 瑛太	子育て支援の充実で若者に選ばれるまちづくりを	11	3,4
及川ゼミ		34	大和田歩 大竹結那 中根 果凜 平賀 凜々子 中屋敷 楓	親とこどもの関わり	4	16
及川ゼミ		35	土谷佑樹 平田菜々美 山村友莉菜 櫻井夢希	購買をよりよく	16	8
及川ゼミ		36	峠 隆己 上谷 竜 林 綾音 宮本大暉	街をきれいに過ごしやすいとする	11	15
及川ゼミ		37	大隅友義 山内蒼一朗 椎名颯太 永野蒼樹	コミュニティバスを活性化させる	11	8,3
横瀬ゼミ		38	酒寄陽大 荒井 涼花 大沼莉奈 宮渕はな	住んでみたいと思うまちづくり	11	8
横瀬ゼミ		39	小島涉 中野淳太 倉島大翔 猪瀬日奈子	高齢者が安定した生活を送るために出来ること	3	11
横瀬ゼミ		40	須藤大斗 佐藤彩実 丸山優依 杉田貴都 松井隼恭	若者の農業従事者を増やそう！！	8	15
横瀬ゼミ		41	島田美和 半田結愛 加藤慶 式田心晴	子育てしやすいまちづくりを目指して	11	8
横瀬ゼミ	2F	42	小川莉子 坂本 莉久 白川 葉由 宮本美季 村上佳央	竜一のゴミの分別	11	15
横瀬ゼミ		43	岩田 真帆 右崎寛太 中村凌久 日下部春駆 吉田海斗	若者の投票率を上げよう	11	8
横瀬ゼミ		44	目等しえな 西原泰世 栗山佑月 原田蓮次郎 宮崎純之介	気候変動について	13	7
横瀬ゼミ		45	今井 孝亮 大村 凜 筒井 大智 長谷川真王 奥西 壮良	茨城県の魅力度向上を図る	11	8
横瀬ゼミ		46	齊藤 大将 宮本優太 高山明優峰 永田陽菜 志田絢音	コミュニティバスをよりよくしよう	11	12,13



↑ 龍ヶ崎市役所との連携 6/8



↑ 企業との連携（グローバル） 10/19



↑ 生徒研究発表会に向けてのゼミ内発表 2/16



↑ 竹園高校 JRC との交流（校内ゴミ問題） 2/16

（３）評価

- ア SDG s を出発点とし、課題解決型の探究活動を通して地域社会が抱える諸問題への知識・理解が深まり、生徒自身が今できることを自ら考え行動に移すことにつながった。
- イ 探究活動を通して、仮説設定・探究計画・オリジナルデータの収集と考察・プロトタイプ作成・社会からのフィードバックという一連の過程を体験した。その結果、探究活動の作成や準備をする際に効率的に行おうとする姿勢がうかがえた。
- ウ 生徒研究発表会において、全グループがポスター発表を行った。1年時終了よりもより高いプレゼンテーション力を習得することができた。また、発表における質疑応答などの様子から、研究成果を自分のものにし、内容をしっかり聞き手に伝えようとする堂々とした姿勢がみられた。
- エ 探究活動を通して、学びに対する意欲的で真摯な姿勢が身につく、進路について考える積極的な態度がみられた。本探究への取り組みは生徒の問題解決能力の向上に大きく寄与していると考えられる。たくましい科学的・グローバル人材の素養を身につけたといえよう。
- オ SDG s と地域課題解決という大きな枠組みはあったものの、ある程度生徒自ら探究課題を設定する仕組みをつくることができた。

（４）成果と今後の課題

本校 76 回生は、「GIGA スクールに対応した 1 人 1 台端末」スタートの当該学年である。また本校では、R3 年度から太田垣校長のリーダーシップにより「デジタルファースト」を強力に押し進め、県内トップクラスの ICT 環境が整った。これまで大きな障害となっていた PC 関連諸問題の大幅な改善により本校の探究活動は飛躍的に発展した。さらに、企業との連携で探究活動のノウハウを学んだことや、龍ヶ崎市との「SDG s パートナー協定」を結んだことで、地域や OB との連携が容易になり、フィールドワークも大幅に広がりを見せた。校内においても全教職員の協力体制の構築は他校の事例と比較しても特筆すべきことであり、誇るべきものであろう。しかしながら、今回の白幡総合探究において課題は残る。例えばテーマの設定である。テーマの設定段階でつまづく生徒が少なからずいた。テーマの設定こそが探究活動の要であり、事前の十分なリサーチが必要だったと思う。また、プロトタイプを作成を元にした社会からのフィードバックを得ることは必ずしも十分だったとは言い難い。その他、参考文献の選別が杜撰であったり、アンケート内容の精選と緻密なデータ分析も必要である。環境が十分に整った今、次年度以降は、この環境を最大限に活かし、より質の高い探究活動に取り組み、生徒の探究心を育成したい。